

司式: 佃 雅之
奏楽: 橋本恵美子

前奏:

招詞: わたしたちの助けは天地を造られた主の御名にある。(詩 124. 8)

讃美歌 19「み栄え告げる歌は」

交読詩編 96: 7-9

07 諸国の民よ、こぞって主に帰せよ/栄光と力を主に帰せよ。

08 御名の栄光を主に帰せよ。供え物を携えて神の庭に入り

09 聖なる輝きに満ちる主にひれ伏せ。全地よ、御前におののけ。

朗読聖書①イザヤ書 9: 5-6

05 ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神/永遠の父、平和の君」と唱えられる。

06 ダビデの王座とその王国に権威は増し/平和は絶えることがない。王国は正義と恵みの業によって/今もそして今後に、立てられ支えられる。万軍の主の熱意がこれを成し遂げる。

朗読聖書②ローマの信徒への手紙 13: 11-14

◆救いは近づいている

11 更に、あなたがたは今はどんな時であるかを知っています。あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。

12 夜は更け、日は近づいた。だから、闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身に着けましょう。

13 日中を歩むように、品位をもって歩もうではありませんか。酒宴と酩酊、淫乱と好色、争いとねたみを捨て、

14 主イエス・キリストを身にまといなさい。欲望を満足させようとして、肉に心を用いてはなりません。

祈禱

憐れみ深い永遠なる神さま。あなたの愛と憐れみに満ちた聖名を心から褒め称えます。

主よ、あなたに導かれて降誕節第一の主の日に、こうして礼拝へと招かれた恵みを心から感謝致します。

あなたは暗闇に光を灯してくださるお方、失望の中にあっても希望の道を開いてくださるお方です。

主よ、私たちは、しばしば、目の前の忙しさや不安に心を奪われ、あなたの御声に気づかず歩んでしまいます。どうか、このアドヴェントの時、私たちの心を目覚めさせ、あなたの訪れを待ち望む者として整えてください。約束された救い主を遣わされたあなたの信実を、もう一度、深く、覚えさせてください。そして、主イエス・キリストが再び来られるその日を待ち望みながら、私たちが悪魔の力から解き放たれ、あなたの御国に生きることができるようにしてください。

主なる神、あなたはいつも、私たち一人ひとりに目を注ぎ、また、一人ひとりに心を掛けてくださいます。私たちは、あなたの御導きのうちに一週間の歩みを終え、与えられた務めを夫々に果たすことができました。この

恵みを心から感謝致します。

しかし、また同時に、私たちは、為し得なかった数々のことを思い起こします。私たちの怠慢により、愚かさによって過ちを犯し、あなたを悲しませたことがありましたことを心からここに悔い改めることが赦されますように。様々なことに配慮が足りなかった、謙虚さが足りなかった私たちを赦し、受け入れてくださいますように切にお願い致します。

主よ、どうか、御言葉によって、私たちの心の中にある傲慢を打ち砕いてくださり、あなたの愛し給う御子イエス・キリストを私たちの心の内に形造ってください。

神さま、地上にあなたの平和を来たらせてください。この世界は未だ戦争により、また度重なる災害によって苦しんでいる者が数多くあります。また、差別や迫害に、人間の偽りと悪意に苦しんでいる者たちもおります。今、生きる希望を失っている人たちに、あなたの御言葉が届きますように。そのために、今、日本の、また世界の各地で献げられています礼拝を祝福の下に置いてください。御言葉を語る者に力を与え、集っている者たちの祈りを強めてくださいますように切にお願い致します。

慰め主よ。願いつつもここに集うことのできない兄弟姉妹のことを覚えて祈ります。どうか夫々が、今、置かれた場所にあつて、あなたからの導きと支えを戴くことができますように。病める者、痛む者、また悩む者、様々の思い煩いを抱え苦しむ者の心の内に、あなたの愛が、あなたの御言葉が響くようにしてください。そして、その御言葉に聞き従う心を与えてくださいますようにお願い致します。

主よ。今朝、あなたが備えてくださいました説教者を感謝致します。笠原義久先生が聖霊の導きを豊かに受けて聖書に記されている尽きることのないあなたの愛が力強く説き明かされますように、主よ、どうぞ、笠原先生を通して、あなたご自身がお語りください。御言葉に聞く私たち一人ひとりが聖霊の導きを受けつつ、あなたの御心を求め、御心に従って歩む者とされますように。そして私たちが、あなたを永久に称え、賛美し、崇めることができますように。

主よ、この礼拝を祝福してください。これらの祈りを主イエス・キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讃美歌 241「来たりたまえわれらの主よ」

講壇「キリストを身にまとう」 笠原 義久

教会の暦では、一年はクリスマス、即ち、降誕節の四週間前のこの『主の日』から始まる待降節、この待降節から新しい一年が始まります。主イエスを待つことから私たちの一年が始まるということは、私たちに与えられている『時の質』を端的に表しており、本当に意味深いと言わなければなりません。

二千年前にこの世に来てくださって、この世、私たちのために救いを成し遂げてくださった主イエス・キリスト、既に来てくださったこの主を、私たちはこの『待降節・アドヴェントの時』、思い起こします。その思い起こしを通して、既に来てくださったキリストが、この世に、教会に、今、聖霊に於いて、事新しく生まれてくださるということ、主イエスが今、私たちの救い主として、事新しくここに臨んでくださるということを信じ、祈り願うのであります。

『待降の時』というのは、もう一つ、“再び来てくださる主キリストを待ち望む”そういう「時」でもあります。主が再び来てくださって、そのご支配、究極の勝利、神の国を確立し完成される、その再臨の主を待つ「時」、その『主の日』を「待つ時」、それがこの『待降の時』でもあります。私たちが“御国を来たせ給え”と祈る者だということ、そう祈らざるを得ない者、そう祈ることが赦されている者であること、そのことを本当に自覚させられる、そういう「時」でもあります。

今お話ししたような教会の暦の意味とは別に、私には『待降』ということにもう一つのことを加えたいと思います。それは、私にとって『私の主の日を待つ時』であるということでもあります。私が“わたしのものに帰れ”《参考：“人の子よ、帰れ(シュープ・ヴェネー・アダム(חֲזֹרְנוּ בְּיָדֵינוּ))” (詩90:3b))》という神の呼び掛けを聞く日、私自身の死を、私自身の終わりを主にあって覚え、そして備える。『待降』ということの中に私は、この“私自身の終わり”というものを覚え備えるという、その意味を加えたいと、そのように思っています。

さて、先ほど、朗読して頂いた「ローマの信徒への手紙」13章、パウロは“キリスト者というものは今がどんな時であるかを知っている、そういう人々のことである”と、そのようにはっきりと言っています。“時を知っている”ということは、“今、自分が何をすれば良いのかを的確に理解し、この時に相応しい行動をすることができる”ということでしょう。“今がどのような時であるか”を知らない者は、踊らなければならない時に眠り、食べなければならない時に歌い、学ばなければならない時に遊ぶ。しかし時を知っている者たちは、今、この時、何をしなければならぬかということ、そのことを知っている。だから今が食事の時間だと、そのようによく知っているので食べることができる、今は走るべき時だと知っているから歩いたりもしない。今は戦わなければならない時だとそのように知っているの、キリストにある光の武具を身につけるのだ”と、パウロはそうのように言っています。

それではいったいキリスト者はどんな「時」を知っているのでしょうか。パウロは言います(11節)。

「あなたがたが眠りから覚めるべき時が既に来ています。今や、わたしたちが信仰に入ったころよりも、救いは近づいているからです。」と、

“だからその終わりから現在をもう一度見つめ直し、そして自分の立ち居振る舞いを、生き方を整えよ”とそのようにパウロは言うのです。

この11節以下の言葉は、「ローマの信徒への手紙」では12章から始まっている“キリストにある者たちの新しい生活の勧め、私たちの立ち居振る舞い・生き方、つまりキリスト者の倫理について話の謂わば『間奏曲』のようなものだ。”と、そのように言ってよいかも知れません。そしてこの『間奏曲』は、“鋭いけれども美しい調べを奏でおり、その役割を十分に果たしている”と言えると思います。これまでにパウロが語った事柄をすべて吸収した上に、それを読む者たちの理解のために整え直され、次の残された勧めへの導入となっているのです。この『間奏曲』には名前が付いています。『時を知れ』、つまりこの『間奏曲』は、聴く者たちを新しい生き方へと誘っているのです。その生き方というのは端的には13節にある「品位ある歩み」ということです。

“キリストによって新しくされた者たちは、「時」を知る者でなければならない。いったい今はどういう「時」なのか、そしてその「時」の眞の支配者は誰なのか、そしてそのことを知ることによって、そこから自分の生き方を整えなければならない。”

そのようにパウロは言っているのです。

さて、先ほど、“時”の眞の支配者”ということを行いました。“時”の眞の支配

者”、それはいったい誰か。

私たちは、この“時”の眞の支配者”は、正に“神ご自身である”ということを知らされている者たちであります。そしてこの「時」の原点は主イエス・キリスト、そのお方に他なりません。この“眞の支配者”が誰であるかということを見誤る人は、誤った方向へ進んで行ってしまいます。誤った者によって支配されてしまいます。だから、逆に言うならば、世の支配者は“時”の眞の支配者”である神から人々を切り離そうとするのです。私たちがいちばん陥り易い誤りというのは、“今がどのような時であるかを忘れてしまうこと”によって、“時”の眞の支配者をも忘れてしまう”と、そのように言ってよいと思います。

先ほど、ここで奏でられている『間奏曲』には名前が付いていると言いました。『時を知れ』、そのように語ることは、現実問題として人々が「時」を忘れて眠ったままであるような状態にあったからこそ、ここで『時を知れ』という『間奏曲』が奏でられなければならないのです。“時”の眞の支配者を知れ”、いったい“今がどのような時なのか、そのことを忘れてしまっている”から、この事が語られなければならないのです。『間奏曲』は鋭く問い掛けます。

“朝が来ている。太陽は既に空高く昇り切っている。それなのに何故、あなたがたはカーテンを閉め切って、まだ夜だと信じ込もうとしているのか。何故、そう信じて眠り続けようとするのか。何故、人々がこのように生きていられるのか。いや、あなたがたは、本当は時を知っているはずだ。もう朝だということ。太陽が昇っているということ。それなのに何故あえて時を知らない者のように振舞うのか。”

『間奏曲』はそのように問いかけているのです。

先ほど、『待降の時・アドヴェント』というのは、“再び来てくださる主キリストを待ち望む時である”、そのように申し上げました。『待降の時』というのは、“主キリストが再び来てくださって、そのご支配、究極の勝利、神の国を確立し完成される、その再臨の主を待つ時、その主の日を待つ時”です。更に、これに加えて、“私の主の日を待つ時”でもあります。ですから私たちが、今、置かれている「時」というのは、“終わりの日待ちつつ、その終わりから整えられた人生を始める”ということ、“終わりを見据えてそこまでの時間を、つまり現在と終わりの間を生きる”ということ、それが“私の主の日を待つ時”ということだと思います。

パウロはこの「時」の間に生きる者たちの立ち居振る舞いについて説明を始めています。それが「主キリストを身にまとう」という生き方です。「主キリストを身にまとう」という生き方、それは12節でより具体的に「闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身につける」とそのように言い直されています。これは折に触れてパウロが繰返し語って来たことであります。「闇の行いを脱ぎ捨てて光の武具を身につける」ということ。『エフェソの信徒への手紙』4章22節以下に次のような言葉があります。

22 だから、以前のような生き方をして情欲に迷わされ、滅びに向かっている古い人 παλαιὸν ἄνθρωπον(パライオン・アンソロポン)を脱ぎ捨て、23 心の底から新たにされて、24 神にかたどって造られた新しい人 καινὸν ἄνθρωπον(カイン・アンソロポン)を身につけ、真理に基づいた正しく清い生活を送るようにならなければなりません。

パウロはここで、“時を知る者たちがどのように生きるべきか”、具体的なイメージをもって語っています。それは“新しい人、主イエス・キリストを身にまとう”という生き方です。“主イエス・キリストを身にまとう”、重要なことは、パウロが“古き人を脱ぎ捨てる”と、それだけではなくて、また“闇の行いを脱ぎ捨てる”というだけでなく、その後、“主イエス・キリストを身にまとう”ということ、そのことを勧めているということです。そして“それがキリスト者の生き方、本当の生き方なのだ”と言っていることです。“脱ぎ捨てるだけではなくて、新しく着ると

ころまでいかなければならない”のです。つまり“信仰は古い習慣を脱ぎ捨て新しい習慣にまでならなければならない。”脱ぎ捨てるということ、それは、私たちが悔い改め、心から回心する、そういう経験であるかもしれない。回心して古い人を脱ぎ捨て洗礼を受けることも知れない。しかしそこで終わってしまっただけでは足りない。終わってしまうならば福音を聞きながら別の原理の下に生きてしまうということが起こり得る。夜が明けて太陽が昇っているということを知っていても、あたかも夜であるかのように生きてしまうということもあり得る。だから“脱ぎ捨てるだけでは駄目なのです。しっかりと着るといこと、そのことが必要だ”と語られているのです。“あの救いの経験が、本当に私たちの身に着的習慣となるように歩まなければならない。”パウロはそのように語っているのではないのでしょうか。

“キリストを身にまとう”と、そのように聴くと多くの人は次のように言うでしょう。“それが宗教というものの恐ろしいところだ。結局、宗教というのは、そのようにして人を縛り付けるものだ。宗教は人間を解放するだけで充分ではないか。そうではなくて新しく人を縛り付ける、そういうものなのだ”と。“主イエスを身に纏うという、結局は人間を宗教に縛り付けるための教えではないか”と、そのように言うでしょう。

そしてこれは実際のところ、キリスト教信仰の、キリスト教という宗教の根本に触れる問題だと言わざるを得ません。

教会は“罪の赦し”を語ります。“あなたの罪を神は赦された”と語ります。“神はそのままのあなたを愛され救いへと招かれた”とそのように語ります。「汝、受け入れられたり」と、そのように語ります。そしてこれは全くの信実であり、寸分も揺らぎのない信実であります。けれども、もし私たちが、教会が、その先を語らないとしたら、私たちは神から受けたことの半分も語っていないのではないのでしょうか。私たちが、“あなたは今あるままでよい、そのままのあなたを神さまは愛してください”、そのように語ることによって、そこには全く違和感はありません。けれども、パウロがここで語っている「品位をもって歩め(：13)」という言葉を見たとき、そこに躊躇いを覚えるとしたら、また、「欲望を満足させようとして肉に心を用いる(：14)」と語ることどこか躊躇いを覚えるとしたら、それは福音の半分しか語っていない、ということではないのでしょうか。

耳触りの良い教えではないかもしれない、厳しい言葉かもしれない、しかし私たちははっきりと語らなければならないのではないのでしょうか。「闇の行いを脱ぎ捨てなければならない」といこと、「品位をもって歩む」こと、「争いを、妬みを捨て、キリストを着るように」といこと、そのように語るということ、そのことを私たちは本当にはっきりと語らなければならないのではないのでしょうか。

13 節にある「品位をもって」という言葉は、元のギリシャ語 εὐσχημόνως(イクスケモノース)では「良い形をもって」という意味です。「良い形をもって」、つまり“私たちは新しい生き方を示さなければならない、新しい生き方の形を示さなければならない、そしてそのように生きることの喜びを語らなければならない”、ということではないのでしょうか。

最後に「キリストを身にまといなさい」と語るパウロの心情に共に触れたいと思います。ここには神の愛、神の救いの熱情に大きく動かされたパウロの心根が吐露されています。「キリストを身にまといなさい」

主イエス・キリストによって「新しい契約」を結ぼうとされた神の愛、神の救いの熱情の大きさというものを言い表した一文があります。このようにあ

ります。

わたしは君にわたしが出来ることを告げるだけではない。—ここで「君」というのは私たちが人間であり、「わたし」とは神のことです。—わたしは君にわたしが出来ることを告げるだけではない。わたしは君を大切に扱おう。君がわたしの前に来て、わたしに仕えるならば、わたしは君を贖う意思と能力があるなどと一般的なことを言うだけではない。わたしは君と契約を交わそうと考えている。すなわち、わたしはわたし自身を縛りつけ、わたし自身を君に係わらせ、約束し、いわば、わたしはもはや自由ではなくなったというほどの思いで、君と新しい契約を結ぼう。

これが“キリストを身にまとう”というときに、私たちに於いて起こっていることではないでしょうか。「キリストを着る」、それは私たちが縛られることではありません。また「神の支配を知る」ということは、私たちの生き方がそれによって縛られ、自由がなくなるということでもありません。ここで言われている“神の信実”というは、神がご自身を縛りつけ、自分自身を人間と係わらせ、約束し、謂わば、“自分は、もうこれで自由ではなくなった”というほどの思いで“私たち人間と約束する”という、それがここで言われている“神の信実”ということではないのでしょうか。

“キリストを身にまとう”とき、神のご支配を知るとき、私たちは私たちが縛られているということを知るものではありません。“ご自分の自由を捨ててまでも、神ご自身が私たちに自らを縛りつけようとしておられる”ということ、そのことを知るのであります。キリストはご自分の自由を捨ててまで、私たちに自らに、私たちにご自分を縛り付けようとしておられるということ、そのことを私たちは知るのでないのでしょうか。そしてその信実に打たれることによって、私たちは“闇の行いを脱ぎ捨てる”という、そういう力を得るのでないのでしょうか。

この今日から始まる一年の始まり、『待降の時』というは、今申し上げたような、“この神の信実を知る時、私たちが新しい生き方へと招かれている”、そういう「時」なのではないのでしょうか。お祈りします。

主なる神、あなたの贈り物としての主イエスをお受けするため、もう一度、心一つにして準備しようとしているこの時、どうか、あなたご自身が私たちに居まし給いますように。

あなたが私たち全てに対し予め計画され、私たち全てについて既に決定され、私たち全てのために既に成し遂げられたことを、正しく感謝に満ちた驚きをもって受け取ることができるよう聖霊の導きを切に祈り願います。主キリストの聖名によって祈ります。アーメン。

讚美歌 229「いま来たりませ」

献金・感謝・主の祈り(堀口恵美)

聖なる父なる御神さま、11月最後の聖日、アドヴェントに入りましたこの日、あなたの御前に集うことが赦され、笠原牧師より御言葉を戴くことができましたこと、心より感謝申し上げます。どうぞこの一週間もこの笠原先生の御言葉を心に刻み、そしてキリストを身に纏って、世に出て行くことが出来ますように、どうぞ御力を与えてください。

私たちはあなたより様々な物を戴いております。その中から、夫々が与えられた物の中からここにお献げ致しました。どうぞ、あなたの御用のためにお使ください。

あなたが私たちに教えてくださいました『主の祈り』を以て、この一週間も

歩んでいくことができますように、どうぞ導いてください。…『主の祈り』ア
ーメン。

派遣：讚美歌 89「共にいてください」

祝福：主イエス・キリストの恵み、神の愛、聖霊の交わりが、とこしなえにあるように。ア
ーメン。

報告：(1)管理委員会：大掃除(窓拭き)施行案内、(2)支援特別委員会・諸教会
連帯資金運営委員会：ミニバザー案内。

後奏：「いざ来りませ、異邦人の救い主」(G. リアルドン)